

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第5号

《研究ノート》

平底円筒形押型文土器に関する一考察
今村 結記

縄文時代の安山岩製スクレイパーについて
桑波田 武志

鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介
黒川 忠広

古代から中世における遺構の方向
―農業開発総合センター遺跡群を事例として―
東 和幸

鹿児島県内の平安時代の土器供膳具の様相
―川内平野の資料を中心に―
岩元 康成

赤色顔料の原料採取地を求めて
―鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から―
内山 伸明・橋本英樹ほか

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ）
永濱功治・内山伸明・中村幸一郎

鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題
―埋蔵文化財センターの取り組みを中心に―
馬籠 亮道

埋蔵文化財を活用した授業の展開
國師 洋之

《資料紹介》
堅野冷水窯跡出土遺物の追加報告
―物原Ⅰを中心に―
関 明恵

西ノ平遺跡出土墨書土器
長崎 慎太郎

荘上遺跡出土資料
―その1―
森 幸一郎

科学分析報告一覧
南の縄文調査室

放射性炭素年代測定集成
内山伸明・園田ひとみ・長野眞一

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2012. 3

縄文の森から 第5号

平底円筒形押型文土器に関する一考察 今村 結記	1
縄文時代の安山岩製スクレイパーについて 桑波田 武志	8
鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介 黒川 忠広	16
古代から中世における遺構の方向 ―農業開発総合センター遺跡群を事例として― 東 和幸	28
鹿児島県の平安時代の土器供膳具の様相 ―川内平野の資料を中心に― 岩元 康成	37
赤色顔料の原料採取地を求めて ―鹿児島県上水流遺跡・関山遺跡の例から― 内山伸明・橋本英樹・古谷充章・團野瑛章・辻広美・高田潤	47
トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅰ） 永濱功治・内山伸明・中村幸一郎	55
鹿児島県の埋蔵文化財調査におけるデジタル技術導入の現状と課題 ―埋蔵文化財センターの取り組みを中心として― 馬籠 亮道	59
埋蔵文化財を活用した授業の展開 國師洋之	69
〈資料紹介〉 豎野冷水窯跡出土遺物の追加報告 ―物原Ⅰを中心に― 関 明恵	75
〈資料紹介〉 西ノ平遺跡出土墨書土器 長崎 慎太郎	87
〈資料紹介〉 荘上遺跡出土資料 ―その1― 森 幸一郎	95
科学分析報告一覧 南の縄文調査室	99
放射性炭素年代測定集成 内山伸明・園田ひとみ・長野眞一	106

鹿児島県の平安時代の土器供膳具の様相

—川内平野の資料を中心に—

岩元 康成

Study on the Haji Ware in the Heian Period from the Sendai plain, Kagosima, Japan

Iwamoto Yasunari

要旨

川内平野を中心に鹿児島県の平安時代の土器供膳具の変遷および様相を検討した。その結果、9世紀末から10世紀初頭を境に前半と後半に分かれた。それは、金属器を頂点とする古代前半から、中国陶磁器を頂点とする古代後半へという全国的な食器の移行による影響が想定された。古代を通じて政治的な要因（律令制など）により土器供膳具の様相は変化した。平安時代末・中世になると経済・流通の変化により貿易陶磁器が増加したため、土器碗の消滅という畿内や太宰府など政治的中心地と様相が異なる鹿児島における中世的な様相が確立した。

キーワード 土師器 黒色土器 須恵器（金属器）模倣 瓷器系

1 はじめに

筆者はこれまで中世の土器を中心に検討をおこなってきたが、中世の特徴を知るためには前段階である古代の様相を知る必要がある。本稿では平安時代の在地産土器供膳具の変遷を検討し、平安時代そして中世の様相を検討したい。

2 研究略史

鹿児島県内の土師器について、まず、中村和美の研究がある。中村は①火山灰を利用した層位学的方法、②搬入品との供伴関係、③遺構の新旧関係の3つの方法を用いて平安時代の土器の変遷、およびそれぞれの帰属時期について検討を行っている（中村1994）。中村はその後古代の土器について再度検討し（中村1997）、坏を5分類、碗を6分類、皿を3分類している。また、主に大宰府との比較を行い鹿児島県内の土器の在地色（在地らしさ）について論じている。

松田朝由は高篠遺跡の報告書で土師器坏・黒色土器の分類を行っている（松田2004）。土師器坏を9類に、黒色土器を坏1類と碗を6類に分類し、器面調整の詳細な観察・検討を行っている。そして、時期を1～6期に分け、鹿児島県全体の様相について述べている。

この他に大島遺跡の報告書で遺構内資料を中心に7世紀末から10世紀にかけての変遷・組合せが示されている（宮田2005）。また、柳ヶ迫遺跡の報告書でも坏・碗・皿などの分類と変遷が示されている（深野2011）。

南九州では平安時代の土器について出合宏光がまとめており、課題として土器相の異なる小地域ごとの編年の作成、土器相の相違、地域の特殊性・普遍性の検討が挙げられている（出合2000）。

森隆は九州の黒色土器の器形的系譜を検討し¹⁾、畿内の黒色土器・瓦器との比較を行っている。その中で南九州の黒色土器についても触れている（森1989）。

また、筆者自身もこれらの研究をもとに県内の古代中世の土器供膳具について検討し、坏と小皿の形態変化から20期に時期区分している（岩元2011）。

これらの研究で指摘されていることをまとめると、

①貞観16（874）年の開聞岳噴火以前の供膳具は須恵器と須恵器形態模倣の土師器で構成されている。噴火以後の9世紀末から10世紀に土師器の坏は底径が縮小する傾向にある（中村1994）。

②9世紀中頃以降須恵器供膳具生産が停止し、土師器供膳具が大量に生産される。また、その出土遺跡数も増加する（中村1994）。

③黒色土器は9世紀前半では坏、9世紀後半以降は碗が多くを占める（中村1994）。

④10世紀中頃には口径10cm前後以下の小皿がみられ、底部の糸切り離し技法は12世紀前半には確実にみられる（中村1994）。

⑤高台付皿は10世紀（松田Ⅳ・Ⅴ期）には器高がなく見込み部分の立ち上がりしがほとんどないものとなる（松田2004）。

⑥10世紀後半以降、土師器碗の高台は足高となり、瓷器系の黒色土器A類碗の形態と異なる（松田2004）。

⑦11世紀の黒色土器碗は高台の幅が狭く高さのないものである（松田2004）

3 問題点と本論の目的

これまでの県内の古代（平安時代）の土器供膳具の研究は県全体の資料を用いたもので土器の型式差を地域差ではなく時期差と誤認している可能性があった。また、基本的に遺構内一括資料から変遷やセット関係を把握すべきであるが、遺構内資料がない場合は包含層資料が用いられていた。器種については碗・坏・小皿についての検討が中心でそれ以外の器種、高台付皿などの検討は行われていない。

しかし、近年特に川内平野において九州新幹線建設に伴う薩摩国府推定地周辺の発掘調査が行われ、1つの地域で遺構内一括資料を中心に、器種に偏りなく土器供膳具の変遷・様相を知ることのできる資料が揃ってきた。そこで、本稿ではまず川内平野の資料を中心に県内の平安時代の土器供膳具の変遷を検討し、様相を把握する。そして県内の様相と他地域との比較を行い、影響や地域性について検討する。

4 方法

本稿では基本的に川内平野の出土資料を用い、まずこれまでの研究を踏まえ、資料の形式・型式分類を行う。

そして坏の変遷を軸に遺構内一括資料から碗・高台付皿の供伴関係を把握し、全体の変遷を検討し、時期区分を行う。なお、時期区分は筆者が以前提示した案をもとに論を進める。基本的に遺構内一括資料を用いるが、川内平野だけでは良好な遺構内一括資料がない時期もある。その場合は包含層資料や他地域の遺構内一括資料を用い、形態の前後関係から変遷案に組み込む。そして提示した変遷案に火山灰や搬入品との供伴事例から実年代を推定する。なお、中島らの指摘（中島2000）を参考に資料を、A：一括性の高い埋納遺構、B：混入の可能性のある遺構内資料、C：包含層資料（その中でも型式差の小さいものをC1・大きいものをC2）という形に資料的価値の等級分けを行う。

最後に提示した変遷案と他地域（主に大宰府と平安京）の土器供膳具の様相との比較を行う。

5 分類基準（図1）

これまでの研究を参考に分類を行う。坏・小皿は形態・調整と法量から分類を行う。碗・高台付皿は大分類を体部形態、中分類を底部（高台）形態、小分類を口縁部形態から分類し、器種ごとに分類する。特に碗は森の黒色土器（森1989）や太宰府での碗の分類²⁾（中島

1992）を参考に分類を行う。

坏

以前拙稿で提示した坏の分類案をもとに分類を行う。坏1・2は奈良時代に当たるので本稿では坏3からみていく。

坏3：箱型を呈する。平底をA、高台付をBとする。

坏4：坏3に比べ底径が小さく逆台形を呈する。底径が大きいものをA、底径が小さく器高が大きい坏5に近い形態になるものをBとする。

坏5：底部が円盤状に突出する。充実高台碗と呼ばれるが前段階の器形からの関連で坏として扱う。

坏6：坏4に比べ口径・底径が小さい（小坏）。

坏7：口径が底径の2倍ほどで器高4cm程度。底部が円盤状に突出するものをA、円盤状にならないものをBとする。また、Aは口径が13cm程度を1、15cm程度を2と細分する。

坏8：口径が底径の1～1.5倍。法量によって細分できる。口径は新しいものほど小さくなる。

坏の多くは土師器であるが、坏3・4は須恵器、坏4・5は黒色土器・赤色土器でも見られる。

碗・高台付皿

体部形態

碗：1－直線的、2－曲線的

高台付皿：1－傾斜が強く深いもの。

2－1に比べ浅いもの。

3－横に伸び扁平なもの。

4－曲線的なもの。

5－平底の小皿と同様の器形。

底部（高台）形態

A－短く太さは均一で端部が角張るか丸みを帯びる。

B－やや長めでハの字状に開く。太さは均一で端部が角張るかやや丸味を帯びる。

C－ハの字状に開く。端部が細く断面は逆三角形で外反する。

D－ハの字状に開く。端部が細くやや外反し、高台内側に幅広の平坦面もしくは凹面を作る。

E－やや長めでハの字状に開き端部が細くなる。

F－短く端部は細い。断面は逆三角形に近い。

G－断面が逆三角形で貼付部分の幅が広く、ハの字状に開く。

H－脚高の高台。ハの字状に大きく開く。

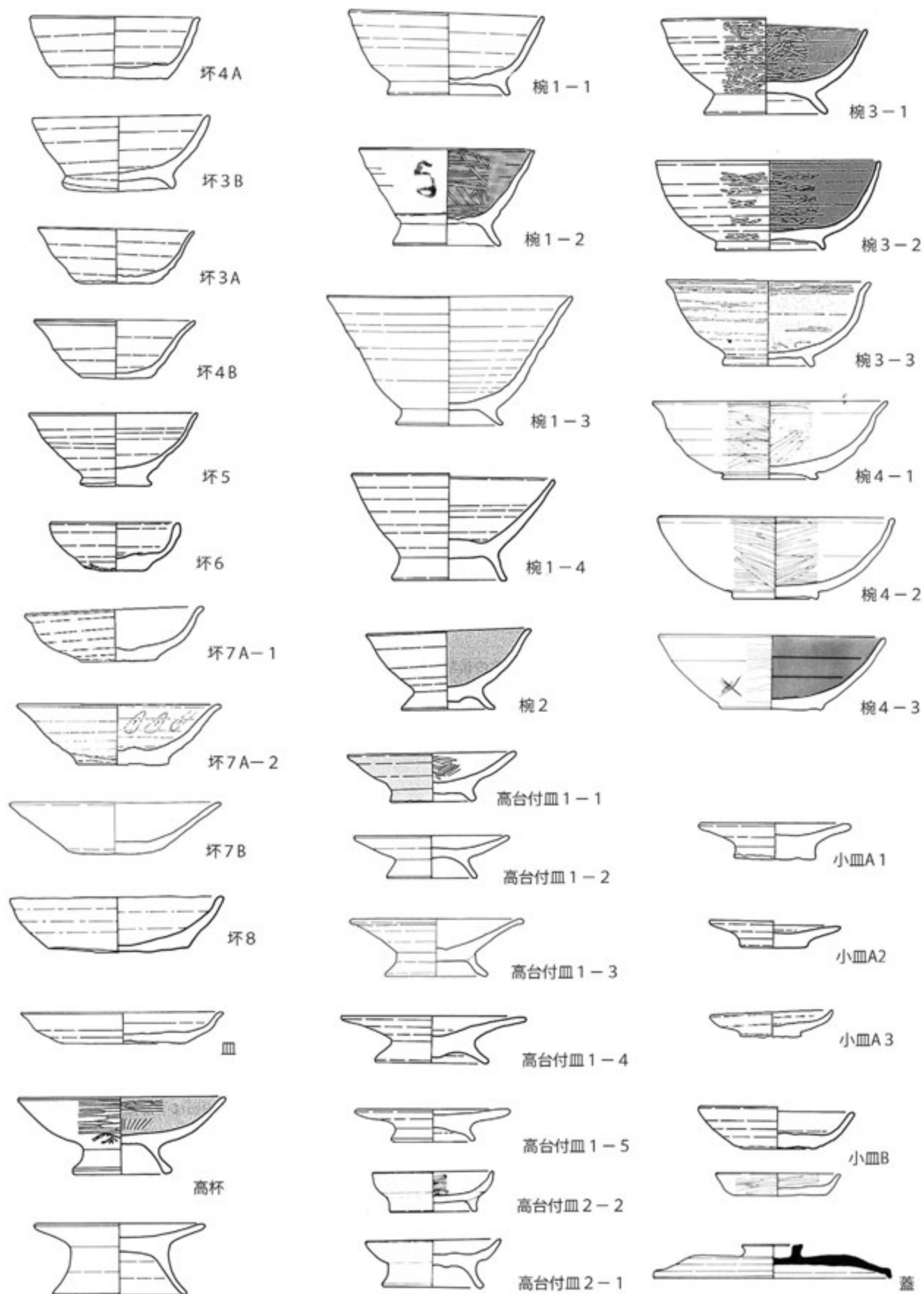
I－断面逆三角形の短い高台を貼付けるがハの字状には開かない。

J－底部に粘土を円形に貼付け、外周部分を押し出して短い高台を作る。

K－高台が短く内底部分が突出気味になる。

口縁部形態

a－直口、b－外反



第1図 土器供膳具の形式分類 (S = 1/4)

椀³⁾

椀1：須恵器（金属器）を模倣したもの。

- 1（1Aa）：須恵器高台付坏に器形が近く、高台は径が大きく低い。
- 2（1Ba）：逆台形の土師器坏にやや長めの高台が付く。
- 3（1Ca）：逆台形の土師器坏に短い高台が付く。
- 4（1Ha）：土師器のみ存在し直線的な体部で脚高の高台が付く。

椀2：体部は曲線的。1類と3類の中間的な形態。

- 1（2Da）：椀部が深く内底と体部の境が不明瞭。
1類に比べ口径に対して高台貼り付け部分の径が狭い。

椀3：瓷器系の形態を模倣したもの。

- 1（2Ea）：口径が大きく椀部が口径に対して浅い。
口径でA（16cm）B（13～14cm）C（10cm：小椀）の3つに分かれる。
- 2（2Fa）：高台が短い以外は椀3-1と同形態で口径から3つに細分される。
- 3（2Fb）：3-2に比べ高台径が狭く、口縁部が外反する。

椀4：高台が短く、瓦器に近い。内外面ともミガキが施される。

- 1（2Gb）：口径が大きく器高が低い。口縁部が外反する。
- 2（2Ia・2Ja）：底部の作りが雑になり、口縁部が直口する。
- 3（2Ka）：3-2より底部が雑で高台としてほとんど機能していない。

黒色土器はいずれの類でも見られ、赤色土器は椀1類に多い。土師器は椀1・2・3類で見られる。

高台付皿

高台付皿1：体部が直線的で外に大きく開く。

- 1-1（1B・1C）：皿部が深い。
- 1-2（1D）：口縁部付近はやや外反気味となる。
- 1-3（2E）：高台付皿1-1よりも皿部が浅い。
- 1-4（3E）：皿部が扁平になったもの。

高台付皿2：小皿に高台が付いたもので、足高の高台のものを2-1（5H）、短い高台のものを2-2（5I）とする。

皿：口径が16cmほどで器高が低く扁平。

小皿：器高が低く扁平なもの。口径が10cm程度。

- A：底部が円盤状を呈するもの。皿部の深さや円盤状底部の高さで細分が可能である。
- 1：体部が直線的で円盤状底部が高いもの。
 - 2：円盤状底部がより低いもの。
 - 3：円盤状底部から体部が曲線的に伸びるもの。
- B：平底のもの。底部の切り離しはヘラ切りと糸切り

がある。法量は次第に縮小する。基本的に土師器でみられるが、黒色土器B類もある。

以上が主要な器種の分類になる。ただ、数は少ないがこれ以外に高坏などの器種も存在する。

6 検討

坏の供伴事例から椀・高台付皿の並行関係を見ていく。なお、拙稿では古代から近世初頭までを20期に区分している。本稿では平安時代にあたる4～11期について検討する。

（1）坏との供伴関係から見た各時期の様相

（第2図・第3図）

4期は箱型の坏3A・Bが指標となり（計志加里遺跡8号土坑：A）、須恵器と土師器の器形がほぼ共通する。他に大皿がみられ、須恵器では宝珠が付く蓋（坏蓋）が見られる。

5期はAとBの2時期に分けられる。5A期は坏4Aと椀1-2が供伴する（計志加里遺跡1号土坑：A）。また、包含層資料では高台付皿1がみられ、大皿もこの段階まで残る。5B期では坏は底径が縮小した坏4Bに変わる（計志加里遺跡2号土坑：A）。須恵器は土師器の坏4Aと大皿と形態が共通し、黒色土器・赤色土器も土師器と形態が共通する。

6期は底部が円盤状（充実高台）の坏5が指標となる。高台の形態が同じ椀2、高高台付皿2が供伴する（大島遺跡集積遺構・柊城跡集積遺構4号）。

7期は小型の坏6を指標とし、土師器椀1-4、高台付皿1-3・4、黒色土器A類椀3類がセットとなる。新しい器種として小皿A-1・2・Bが加わる（鍛冶屋馬場遺跡集積遺構1～3号・土器集中：A、大島遺跡5号住居：B、武遺跡E地点31号土坑：A、鍛冶屋馬場遺跡包含層資料：C1）。

8～10期は川内平野では良好な資料が少ないため、川内平野以外の地域の遺構内一括資料を用いる。

8期は円盤状の底部をもつ坏7Aと小皿A4を指標とし、黒色土器A類椀3-3がセットとなる。坏の口径によって新旧を分けられ、口径のより小さい坏7A1が8A期（日置市向柊城跡円形周溝遺構：A）、より大きい坏7A2が8B期（鹿児島市武遺跡H地点土坑1：A）となる。土師器椀は足高の1-4類がこの段階まで残る。

9期は坏7Bと小皿Bと黒色土器A類椀3-4がセットとなる（霧島市弥勒院跡）。包含層資料では高台付皿2-2・2-3がこの段階、もしくは前後の段階に入ると思われる。

10期は底部切り離しが糸切りの坏7Bと小皿B、黒色土器A類椀3-5と糸切り小皿Bが供伴する（いちき串木野市上城跡城跡SK-21：A、日置市原口遺跡土坑1・土坑3：A）。この段階から土師器の坏と小皿は底

部の切り離しがヘラ切りから糸切りに変化する。黒色土器A類碗の高台内や黒色土器B類小皿にも底部に糸切りが残る資料がみられる。

11期は現在のところ黒色土器と供伴する事例はみられない。成岡遺跡ピット状遺構では白磁碗Ⅳ類に土師器坏8と小皿Bが供伴する。

(2) 実年代

現在、川内平野の資料で実年代がわかる資料はほとんどないため、県内の他地域の事例を参考に実年代を推定する。まず開門岳の噴出物（紫コラ）の上下の様相については中村がすでに指摘している（中村1994）。それによると坏は下層では逆台形（坏4A）で上層からはより底径の小さい坏（坏4B）が出土している。このことから5A期と5B期を874年以前（9世紀中～後）と以後（9世紀末）で分けられる。

坏6（充実高台碗）は大宰府条坊跡第89次SK065からの出土例（中島・城戸1994）から10世紀初頭前後（大宰府のⅦ～Ⅷ期）に位置づけられる。

桑幡氏館跡13号溝からは坏8（口径15～16cm）と樟葉型瓦器碗Ⅲ-2（12世紀末～13世紀初頭）が出土している。また、全国的に坏の口径が15～16cmになる時期12世紀代であることから12世紀後半に位置づけられる。

資料数・精度がまだ低く今後変更が考えられるが、以上の資料を実年代推定の定点とすると、4期が9世紀前半、5A期が9世紀半ば、5B期が9世紀後半、6期が10世紀前半、7期が10世紀半ばから後半、8A期が11世紀前半、8B期が11世紀後半、9期が11世紀末から12世紀前半、10期が12世紀半ば、11期が12世紀後半から13世紀初頭に現状では位置づけておく。

(3) 画期

各時期の土器供膳具様相を検討したが、その様相からいくつかの画期を見出すことができる。

4・5期は碗・坏を中心に大皿・高台付皿で構成される。土師器と須恵器・黒色土器A類・赤色土器は同一器種であれば形態も同一である。その形態は金属器・須恵器を模倣したもの、もしくはそれから形態がやや変化したものとなる。

6期に大皿は消滅し、7期では碗・坏・高台付皿に小皿が加わる。碗・高台付皿は瓷器系の曲線的な体部という新しい要素が出現する時期である（松田2004）。ただ、6期は曲線的な体部を持つが瓷器系の形態とは異なる碗2類や同一器種の同一形態が残るなど過渡期的な様相を示す。7期は須恵器系の形態が残る土師器と瓷器系の黒色土器で形態が異なり器形・法量のヴァリエーションが多い。

8・9・10期は7期の状況とは逆に碗・坏・小皿のいずれの器種も次第に1つの形態に収斂し、基本的に碗が黒色土器A類、坏と皿が土師器で作り分けがされるよう

になる。

11期にはさらに碗形態が消滅し坏・小皿のみとなり、中世の基本となるセット関係が出来上がる。11期ごろは中国華南産白磁や龍泉窯系・同安窯系青磁が増加する時期で（中村2007）、遺構内資料でも土坑墓を中心に白磁・青磁碗と土師器坏・小皿がセットとなる例がある。中国産陶磁器が増加した結果、碗は陶磁器が主流となり、土器碗は駆逐され、生産が終了したと考えられる。

7 他地域との比較

本項では太宰府や畿内など地域の研究から様相と画期についてみた後、鹿児島県の土器と比較し共通点・相違点をみる。

(1) 他地域の様相

大宰府の土器編年（山本1990・中島1992）ではⅧ期までは須恵器の系譜を引く坏や碗で構成され、Ⅷ期（9世紀末～10世紀初）に坏aから小皿aが分化し（山本1990）、瓷器系の碗Ⅲ類（中島1992）が出現する。

太宰府・九州以外の地域の様相についてみると、9世紀半ばから末にかけて金属器を頂点としてその器形を模倣する古代前期の食器様式が変化し、10世紀以降は中国陶磁器を頂点として器種ごとの作り分けがされる古代後期・中世へと続く食器様式⁴⁾へと変化する（宇野1989）。また、10世紀以降畿内では碗は黒色土器B類・瓦器、土師器は皿を中心に生産され、器種によって分業が行われる中世的な土器様相へと変化する。

(2) 共通点

①6期（太宰府のⅧ期とほぼ同時期にあたる）以前は、大宰府同様に坏・碗ともに須恵器の系譜を引く形態で構成される。また、種類を超えて形態が一致する。

②7期は大宰府の碗Ⅲ類が指向する瓷器系の器形になる。

③11～12世紀には黒色土器A類碗、土師器坏・小皿の器種構成になる。

(3) 相違点

①6期は新しい要素（曲線的な碗の体部）が入るが、瓷器系の碗と小皿は7期からみられる点で大宰府と時間的な差がある。また、6期以降は坏の形態と法量が異なる。

②12世紀後半には土器から碗形態は消滅する。貿易陶磁器の碗・皿が増加し、供膳具の主体が入れ替わる。

(4) 小結

6～7期に土器供膳具全体で大きな変化があり、特に6期の様相は地域色が強い。この変化や地域色は太宰府、全国的な土器（食器）様相の変化の影響と考えられる。6期の地域色の強さは、平安京・畿内から大宰府を経て情報が伝わる時間や正確さ（模倣対象を実際に見て器が製作されたか、対象の情報のみだったか）に起因すると

考える。

それぞれの土器は細部で地域色がみられるが、県内の土器供膳具の様相と画期は基本的には畿内（平安京）・太宰府といった政治的中心地での食器の在り方の影響を受けている。特に形態・製作技法で太宰府との共通点が多く、畿内から発信された土器の変化を太宰府経由で影響を受けて在地土器が変化していると考ええる。その影響は上位の器である須恵器（金属器）や中国陶磁器・国産陶器を土器で模倣している点に最も表れている。そして、土器で上位の器を模倣する点からは畿内や太宰府同様（宇野1989・中島1992）に、使用者の身分・官位によって使用する器の種類が分けられていたことが想定される。

ただし、12～13世紀の土器からの碗形態の消滅は政治的中心地からの影響だけで説明出来ない部分もある。それはむしろ経済、流通の変化、特に陶磁器の流通量が増加したことが器種構成の地域色を生み出したと考ええる。

8 終わりに

本稿では遺構内一括資料を中心に平安時代の土器様相の検討を行った。その結果土器供膳具の変化は太宰府や畿内などの土器（食器）様相の変化の影響と考えた。土器の形態や製作技法の面では地域色も多くみられるが、模倣する対象、器種構成そして使用者の身分による器の使い分けの変化は基本的に政治的中心地の意向を受けていた。ただし、中世になると政治的中心地の影響もあるが、陶磁器の流通量増加という経済的な要因によって器種構成の地域色が現れるという様相もみられた。最後にいくつかの課題を挙げておきたい。

- ①さらに細分をおこない、遺構・遺跡の変遷を追えるようにする。
- ②現在は記年銘資料がない。今後記年銘資料が発見された際により正確な実年代を決定する必要がある。
- ③今回は中世との比較は行ったが平安時代の土器様相の特徴を知るためには前の奈良時代と比較する必要がある。県内では8世紀の遺跡が少なく、9世紀になると増加すると言われている（中村1994）。8世紀の様相を知るには土師器だけでなく、あまり研究されていない在地産の須恵器の検討を行う必要⁵⁾があると考ええる。また、古代前半そしてその前段階（古墳時代）を含めた器種組成（相美2004など）と比較する必要がある。

謝辞

本稿を執筆にあたり以下の方々に大変お世話になりました。末筆ではありますが、ご芳名を記して感謝の意を表します。

重久淳一 常田和彦 長野陽介 藤井大祐
（五十音順・敬称略）

【註】

- 1) 九州系黒色土器を4分類（Ⅰ類：平底の坏。Ⅱ類：須恵器模倣土師器の高台付坏の形態を祖型。Ⅲ類が金属器の影響下に成立した器形。Ⅳ類：磁器系深碗指向型）している。
- 2) 土師器碗を4、黒色土器A類を3、黒色土器B類を2、瓦器を2つに系統ごとに分け、それらをさらに細分している。土師器と黒色土器A・B類の碗Ⅰ類が須恵器、碗Ⅲ類が灰釉陶器などの瓷器系の焼物、土師器Ⅳ類・瓦器Ⅱ類が畿内系黒色土器B類と瓦器碗を模倣したものとしている。
- 3) 分類（森1989）のⅡ類が碗1類、Ⅳ類が碗3類に当たる。太宰府の碗分類（中島1992）のⅠ類が1類、Ⅲ類が3類、Ⅳ類および瓦器2類が4類と該当、類似する。
- 4) 宇野は古代を9世紀半ばから末頃を境に前半を「律令国家的食器様式」、後半を「王朝国家的食器様式」に分け、王朝国家的食器様式は弥生時代から発展してきた素材を超えて形態を模倣する写しの体系の最後の段階としている。そして次の「中世的食器様式」では素材ごとの形態が選択される段階となる（宇野1989・1996、森2001）。
- 5) 全国的には8世紀は須恵器が多く使用されるが、9世紀になると生産コストなどから土師器が増加する（宇野1989）。

【引用・参考文献】

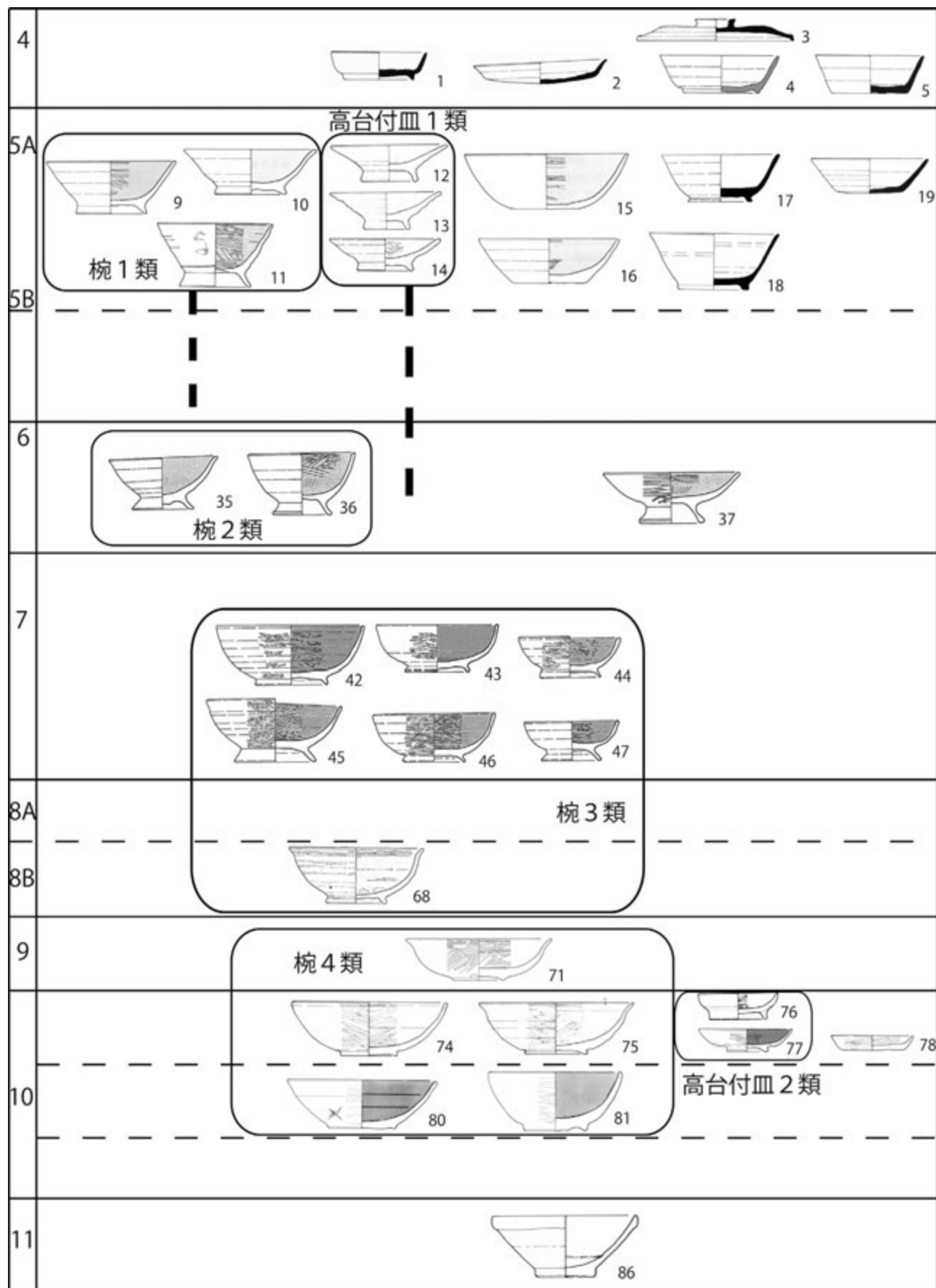
- 岩元康成 2009「鹿児島県における12～17世紀の土師器」『南の縄文・地域文化論考』pp.205-220 南九州縄文研究会
岩元康成 2010「付編2 宮内地区の土師器」『弥勒院跡（遺物編）』霧島市埋蔵文化財調査報告書 pp.114-120 霧島市教育委員会
岩元康成 2011「鹿児島県の遺構内完形遺物の組成」『中世土器研究会第30回大会発表資料』中世土器研究会
宇野隆夫 1989『古代と中世の歴史と社会』真陽社
宇野隆夫 1996『古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器』埋蔵文化財研究会
相美伊久雄 2004「成川式土器の器種組成について（予察）－杯型土器の様相を中心に－」『縄文の森から』第2号 pp.29-36
出合宏光 2000「九州南部における平安時代の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』XⅣ 日本中世土器研究会
出合宏光 2004「九州南部における11～14世紀の土器」『中近世土器の基礎研究』XⅧ pp.143-152 中世土器研究会
中島恒次郎 1992「太宰府における碗形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会
中島恒次郎 2000「太宰府における実年代推定資料」『中近世土器の基礎研究』XⅣ 日本中世土器研究会
中島恒次郎・城戸康利 1994「薩摩国から来た食器－大宰府条坊跡 第89次調査出土資料－」『中近世土器の基礎研究』X pp.173-180 日本中世土器研究会
中村和美 1994「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の食器について－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』X pp.149-171 日本中世土器研究会
中村和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 pp.88-102
中村和美 2007「南九州の土器・陶器」『中世窯業の諸相 補遺編』pp.327-328
深野信之 2011「出土遺物の様相」『柳ヶ迫遺跡』始良市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 pp.11-14, 163-164 始良市教育委員会
松田朝由 2004「土器の製作技術と土器様相」『高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）pp.387-389 鹿児島県立埋蔵文化財センター

宮田栄二 2005「出土遺物」「古代について」『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80) pp.207-238, 318-324 鹿児島県立埋蔵文化財センター
森隆 1989「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」『古文化談叢』21
森隆 2001「平安時代の土器研究史概観」『中世土器研究論集』pp.269-297
山本信夫 1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて」『乙益重隆先生古希記念論文集 九州上代文化論集』pp.349-386
山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性―九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 pp.237-310 国立歴史民俗博物館

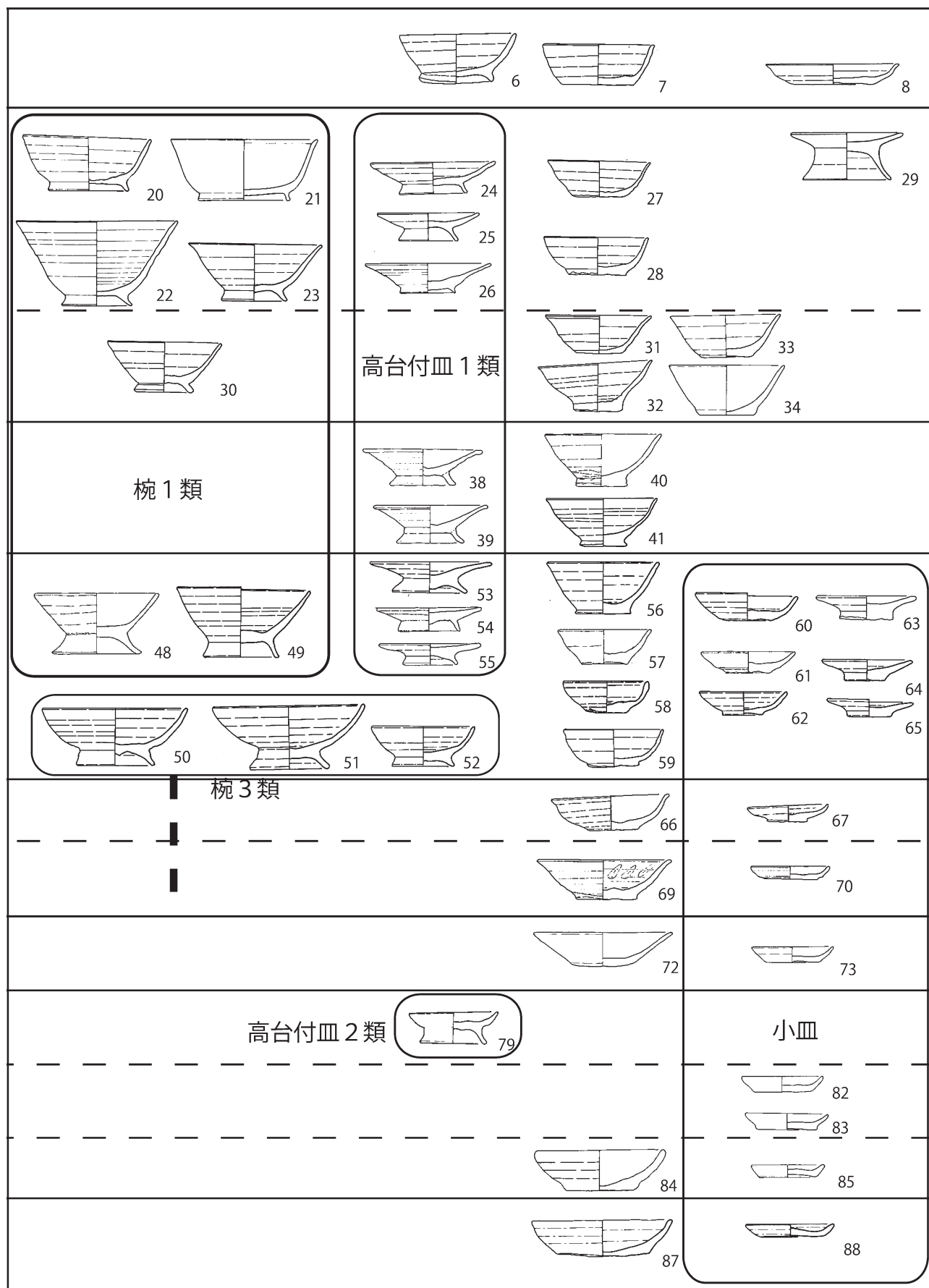
【引用・参考報告書】

市来町教育委員会 2000『上城詰城跡』市来町埋蔵文化財調査報告書(7)
鹿児島県教育委員会 1983『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(28)
鹿児島県教育委員会 1985『成岡遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(35)
鹿児島県教育委員会 1992『榎崎A遺跡』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(63)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『計志加里遺跡』鹿児島

県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(38)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(68)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(80)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『向柵城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(129)
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010『柵城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(155)
鹿児島市教育委員会 2004『武遺跡E地点』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(42)
鹿児島市教育委員会 2010『武遺跡H地点』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書(60)
霧島市教育委員会 2010『弥勒院跡(遺物編)』霧島市埋蔵文化財調査報告書(8)
霧島市教育委員会 2011『気色の杜遺跡』霧島市埋蔵文化財調査報告書(12)
川内市教育委員会 1985『薩摩国分寺跡』
隼人町教育委員会 2003『桑幡氏館跡』
日吉町教育委員会 2003『原口遺跡』日吉町埋蔵文化財調査報告書(4)



第2図 平安時代の土器供膳具（須恵器・黒色土器・赤色土器）変遷試案（S = 1/6）



第3図 平安時代の土器供膳具（土師器）変遷試案（S = 1/6）

第1表 変遷図掲載遺物法量（1）

番号	種類・器種	遺跡・遺構名	法量		
			口径	底径	器高
1	須恵器椀	大島遺跡	10.3	7.6	3.1
2	須恵器皿	大島遺跡	14.6	11.9	2.3
3	須恵器蓋	大島遺跡	17.1		
4	須恵器坏	大島遺跡3号住居	12.8	8.4	4
5	須恵器坏	大島遺跡	11.8	8.4	4.15
6	土師器坏	計志加里遺跡3号土坑	12	7.8	4.3
7	土師器坏	計志加里遺跡3号土坑	12.8	8	5.5
8	土師器皿	大島遺跡3号住居	14.6	8.4	2.2
9	黒色土器A類椀	大島遺跡	14.2	7.75	5.75
10	赤色土器椀	大島遺跡	14.5	7.8	4.9
11	黒色土器A類椀	計志加里遺跡1号土坑	12.5	7.4	7.2
12	黒色土器A類高台付皿	西ノ平遺跡	12.8	6.3	4
13	黒色土器A類高台付皿	西ノ平遺跡	12.2	5.2	4.1
14	土師器高台付皿	大島遺跡34号住居	12.2	6.2	3.5
15	黒色土器A類坏	大島遺跡	17.8	6.7	6.05
16	黒色土器A類坏	大島遺跡	15.3	8	4.85
17	須恵器椀	柗城跡	13	6.8	5.2
18	須恵器椀	柗城跡	14.2	7.8	6.2
19	須恵器坏	大島遺跡	12.8	7.4	3.8
20	土師器椀	大島遺跡	13.1	8.8	5.9
21	土師器椀	西ノ平遺跡	15.8	10	6.7
22	土師器椀	大島遺跡	17.8	7.8	9.15
23	土師器椀	大島遺跡	14.7	7.2	6.25
24	土師器高台付皿	大島遺跡6号住居	13.7	7	3.5
25	土師器高台付皿	大島遺跡	11	6.4	3.05
26	土師器高台付皿	西ノ平遺跡	13.6	6	3.3
27	土師器坏	計志加里遺跡1号土坑	11.4	5.6	5.2
28	土師器坏	計志加里遺跡1号土坑	11.5	6.3	4.2
29	土師器高台付皿	大島遺跡	12.2	9.6	5.1
30	土師器碗	計志加里遺跡2号土坑	12.6	6.6	6
31	土師器坏	計志加里遺跡2号土坑	11.7	5.2	4.3
32	充実高台碗	計志加里遺跡2号土坑	12.7	5.4	5.8
33	土師器坏	大島遺跡6号住居	12.1	5.6	4.55
34	土師器坏	西ノ平遺跡	12.2	6	5.5
35	黒色土器A類椀	大島遺跡土師器集積土坑	11.7	6.4	6.7
36	黒色土器A類椀	大島遺跡土師器集積土坑	11.8	6.7	5.7
36	黒色土器A類高坏	大島遺跡土師器集積土坑	15	7.1	5.5
38	土師器高台付皿	柗城跡土器集中遺構11号	13.6	7.6	4
39	土師器高台付皿	柗城跡土器集中遺構10号	13	7.6	4.3
40	土師器坏	柗城跡土器集中遺構8号	13.3	5.9	6
41	土師器坏	大島遺跡土師器集積土坑	12.2	5.2	5.2
42	黒色土器A類椀	鍛冶屋馬場遺跡土師器集積遺構1号	13.4	6.8	5
43	黒色土器A類椀	鍛冶屋馬場遺跡土師器集積遺構1号	16.1	8	6.45
44	黒色土器A類椀	鍛冶屋馬場遺跡	10.4	6.6	4.3
45	黒色土器A類椀	鍛冶屋馬場遺跡土師器集積遺構2号	14.9	8.7	6.9
46	黒色土器A類椀	鍛冶屋馬場遺跡土師器集積遺構2号	13.5	6.9	5.4
47	黒色土器A類椀	鍛冶屋馬場遺跡土師器集積遺構2号	11.2	6.6	4.4
48	土師器高台付皿	武遺跡E地点土坑31	14.65	10.55	7.1
49	土師器椀	鍛冶屋馬場遺跡	14.7	8.3	7.8
50	土師器椀	鍛冶屋馬場遺跡	16	8.6	6.3

第2表 変遷図掲載遺物法量（2）

番号	種類・器種	遺跡・遺構名	法量		
			口径	底径	器高
51	土師器椀	鍛冶屋馬場遺跡	16.6	8.6	6.9
52	土師器椀	鍛冶屋馬場遺跡	11.4	6.8	4.4
53	土師器高台付皿	鍛冶屋馬場遺跡	13.3	8.2	4.3
54	土師器高台付皿	武遺跡E地点土坑31	12.5	7.3	2.8
55	土師器坏	鍛冶屋馬場遺跡	9.8	5.1	3.4
56	土師器坏	鍛冶屋馬場遺跡	12.3	6.1	5.7
57	土師器坏	武遺跡E地点土坑31	11.5	5.98	3.86
58	土師器坏	鍛冶屋馬場遺跡	9.4	4.2	3.5
59	土師器坏	大島遺跡34号住居	10.9	5.6	4.1
60	土師器小皿	鍛冶屋馬場遺跡土師器集積遺構3号	11.4	5.35	3
61	土師器小皿	武遺跡E地点土坑31	10.9	5.84	2.95
62	土師器小皿	鍛冶屋馬場遺跡	9.6	4.3	2.6
63	土師器小皿	大島遺跡5号住居	11	5.9	2.55
64	土師器高台付皿	鍛冶屋馬場遺跡	10	4.5	2.3
65	土師器高台付皿	鍛冶屋馬場遺跡	8.4	4.8	1.95
66	土師器坏	向柗城跡円形周溝墓	13.45	5.5	4.05
67	土師器小皿	向柗城跡円形周溝墓	8.8	4.55	1.8
68	黒色土器A類椀	武遺跡H地点SC01	15.4	6.9	6.4
69	土師器坏	武遺跡H地点SC01	15.4	7	4.6
70	土師器小皿	武遺跡H地点SC01	9	6.2	1.5
71	黒色土器A類椀	弥勒院跡158土坑	16	5.6	4.5
72	土師器坏	弥勒院跡158土坑	15.53	7.33	4.07
73	土師器小皿	弥勒院跡158土坑	8.69	9.3	1.66
74	黒色土器A類椀	西ノ平遺跡	17	6.8	5.6
75	黒色土器A類椀	西ノ平遺跡	16.6	6	5.9
76	黒色土器A類高台付皿	掘立柱建物2	8.8	6.4	2.9
77	黒色土器A類高台付皿	渡畑遺跡	8.5	3.8	2.2
78	黒色土器B類小皿	西ノ平遺跡	8.8	6.8	1.7
79	土師器高台付皿	西ノ平遺跡	9.4	7	3.4
80	黒色土器A類椀	原口遺跡土坑1	16.4	7.4	5.4
81	黒色土器A類椀	原口遺跡土坑3	14.8	7	6.4
82	土師器小皿	原口遺跡土坑1	9.2	6.8	1.8
83	土師器小皿	原口遺跡土坑3	8	6.2	1.4
84	土師器坏	上城詰城跡SK-12	13.8	6.5	4.1
85	土師器小皿	上城詰城跡SK-12	7.7	5.8	1.2
86	白磁碗	成岡遺跡ビット状遺構			
87	土師器坏	成岡遺跡ビット状遺構	15.2	10	4
88	土師器小皿	成岡遺跡ビット状遺構	9.5	6.8	1.5

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要 **縄文の森から** 第5号

発行年月 2012年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail minami@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 (有) 国分新生社印刷

〒899-4301

鹿児島県霧島市国分重久 627-1
